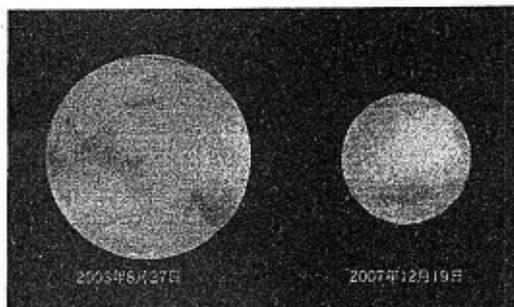


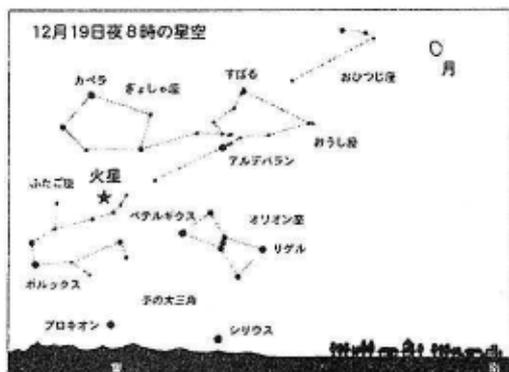
火星接近

まもなく、火星が地球に近づいて観察しやすくなります。
 火星は地球と同じように太陽のまわりをまわる惑星で、直径はおよそ地球の半分の大きさをしています。地球と火星の軌道の関係からだいたい2年2ヵ月ごとに地球に近づいてきますが、前回の2005年10月以来、今年は12月19日に最接近します。



大接近のときの大きさ 今回の接近で見える大きさ

その時の地球からの距離はおよそ8800万kmで、2003年の大接近の時と比べると1.5倍ほど遠く、見える大きさも3分の2程度（満月の110分の1の大きさ）になります。しかし、明るさは-1.6等級で、全天でも最も明るい恒星のシリウス（-1.4等星）よりも明るくなります。火星の見える場所は、ふたご座、おうし座あたりにあります。12月19日の午後6時には東の空に赤く輝き、真夜中頃には見上げる角度が80度にもなり、ほとんど頭のとっぺんにあるように感じます。望遠鏡で天体を観察する場合は、一般に空高くある方が、空気によるゆらぎが少なく、細かいところまで見えます。今年の火星は4年前の大接近ほど大きくは見えませんが、



ば望遠鏡で観察するための条件は良いので、ぜひ皆さんも観察してみてください。



マーズ・リコネッサンス (予想図)



フェニックス (予想図)

さて、火星にはほとんど毎年のように火星探査機が向かっています。アメリカのマーズ・リコネッサンスは2005年8月に打ち上げられ、昨年3月に火星に到着しました。今は火星のまわりを回りながら、火星表面のわずかに数十センチ程度のもので見分けられる高性能なカメラで火星を調べていて、将来、人類が着陸できそうなところも探っています。さらに、今年の8月に打ち上げられたアメリカの探査機フェニックスは来年5月25日に火星に到着し、北極の極冠に着陸する予定です。火星の地表の大部分は赤茶けた岩石の大地ですが、極冠には炭酸ガスの凍ったドライアイスがつもっていて、望遠鏡でも白く見えますが、その下には氷、つまり水もあるのではないかと考えられています。この探査機は水を見つけることが最大の目的で、もし、実際に見つけることができれば、今までの火星探査機の中でも最大の発見となるでしょう。火星に豊富な水があることがわかれば、将来に人間が移住することも夢ではなくなるでしょう。